

津幡高校創立 100 周年プロジェクト

私たちの取り組んでいるプロジェクトに関して、この3つの順に説明していきたいと思います。
まず初めに、プロジェクトの目的です。

目的の一つ目は

- ・ 令和5年の創立100周年に向けて、総合学科2年生全員が「養蚕」を実践し、生命、責任、労働、妥協、怠惰、思考、関心、五感、達成感などの様々な感情や感覚を、蚕＝生き物の飼育を通して、新たに発見する機会とすることです。

二つ目は、

- ・ 津幡高校の特色である「養蚕」に関わる活動を通して、本県の歴史や文化・伝統を学ぶとともに、商品開発など創造性豊かな人材の育成を目指すことです。

三つ目は、

- ・ 地域に根ざした活動を実践することにより、将来にわたって地域に貢献できる人材の育成を目指すことです。

四つ目は、

- ・ 本プロジェクトの最終的なゴールとして、石川県の伝統工芸品である「牛首紬」を、石川県産（津幡高校産）の繭で製作したいと思っています。

では、プロジェクトの目的を達成するための具体的な活動内容について説明します。

活動内容も、大きく4つに分けて説明します。

まず初めに、養蚕とは何かについてご説明します。

養蚕とは、カイコ（蚕）を飼育して繭から生糸（絹）を作ることです。また、カイコ（蚕）は、桑の葉しか食べることしかできないので、養蚕農家は必然的に桑畑の管理も行わなければいけません。

さて、みなさんこの地図記号は何かわかりますか？

正解は、桑畑のマークです。ちなみに、植物名が分かる地図記号は、イネを育てる水田、茶畑、竹林、笹ぐらいです。では、なぜこれらの植物に混ざって、桑畑だけを限定した地図記号が存在するのでしょうか？

それは、桑畑が、かつて日本のどこにでもある風景だったからです。その面積は、全国の畑地の約4分の1と言われていています。ではなぜ、畑地の4分の1ほどの桑畑が日本に広がっていたかというと、日本は世界一の養蚕大国だったからです。

養蚕によって得られる良質な生糸は、当時の日本の外貨獲得産業であり、近代日本の礎を築いたと言われていています。その量は、最盛期である1929年には約40万トンにも達し、世界の生糸の約8割を占めていました。こういった背景があったからこそ、群馬県の富岡製糸場が世界遺産に登録されたのです。

そして、この世界一の生糸生産を支えたのは、当時の養蚕農家と製糸工場です。最盛期の数は、養蚕農家が全国で約221万戸、製糸工場の数が1万2640か所となっており、この数は、全国の農家の約4割が養蚕農家だったことを示しています。

ではここで、会場の皆さんに質問です。現在の日本の養蚕農家数はどのくらいだと思いますか？

正解は、こちら！！

これは、養蚕業の統計データを記載している、一般財団法人 大日本蚕糸会のシルクレポートです。ここをご覧ください。これは2000年と、2021年の養蚕農家と製糸工場の数をマークしたものです。今

年度の 2022 年のデータはまだなので、昨年度までのデータが最新ということになると思うのですが、養蚕農家はこの 20 年間で、3280 戸から、186 戸まで激減しているのがわかると思います。製糸工場はほぼ変化はありませんが、最盛期の 1 万 2640 か所あったところから比べたら、こちらも激減していると言わざるを得ないと思います。

このようになってしまった背景には、化学繊維の普及や、安価な生糸の輸入などが考えられ、伝統ある日本の繭生産量は自給率 1%以下になっています。このままでは、あと数年で我が国の養蚕業は壊滅するとさえ言われています。

続いて、津幡高校と養蚕についてご説明します。

津幡高校は、大正 13 年に河北農蚕学校として設立され、以降、数々の変遷を経て、現在に至っています。設立当初の学校名からもわかるように、そのルーツは養蚕を学ぶ学校でした。

それでは、当時の津幡高校の養蚕の様子を表した写真をご覧ください。

(写真 1 枚目)

これは、当時の桑畑の前での写真です。

(写真 2 枚目)

これは、桑の葉を切って細かくしている様子です。

(写真 3 枚目)

これは、蚕にエサである桑の葉を与えているところです。

(写真 4 枚目)

これは、繭の収穫の様子です。

(写真 5 枚目)

これは、収穫した繭を、選別しているところだと思います。

そして、ここからは今年度私たちが行った養蚕の様子です。

(写真 1 枚目)

これは、生まれたての蚕の赤ちゃんに初めて桑の葉を与える、「掃きたて」という作業の様子です。生まれたての蚕の赤ちゃんは、黒くアリのように見えるので、蟻蚕とも呼ばれます。

(写真 2 枚目)

これは、蚕が脱皮をした後に、飼育場所の移動を行っている場面の写真です。

(写真 3 枚目)

これは、脱皮前と、脱皮後の、蚕の選別を行っています。

(写真 4 枚目)

これは、大吾です。

(写真 5 枚目)

これは、簇といわれる繭を作る場所から、繭を外している作業の様子です。

突然ですが、今からお蚕様が桑を食べる様子をご覧ください。虫が苦手な方はご注意ください。それでは、レッツゴー！！

(タイムラプス動画)

いかがでしたか？全盛期のお蚕さんの桑の食べっぷりは魔法かな？と思うくらいに、さっきあげた桑の葉が一瞬で無くなります。その為、飼育を行う私たちは常に桑の葉を収穫しに農場へと通っていました。

続きまして、昨年度までの産学連携事業について、ご紹介します。

この表にあるのは、今までにお世話になった主な連携企業です。

中でも、令和2年度には、本校で飼育した蚕の繭から、長野県の株式会社宮坂製糸所さんのご協力のもと、初めて生糸になりました。

そして、その生糸は、地元石川県小松市の織物業者である、山木絹織さんのご協力のもと、素敵な絹生地になりました。

これは、出来上がった絹生地を広げて見ているところです。

出来上がった絹生地を、製品として仕上げるために、何を作るのかから考えました。考える際に、地元の若手農業者のグループである、かほく農業青年グループの方々に来校していただき、絹生地販売戦略会議を行いました。その結果、シルクマスクとシルクハンカチーフを製作することに決まりました。

また、この会議では、原価計算や実際の販売価格等を相談し、シルクマスクは1枚1500円、シルクハンカチーフは1枚1000円で販売することが決まりました。

また、シルクマスクに付加価値をつけるために、かほく農業青年グループの方々が栽培している野菜等を使って、草木染も行いました。これは、その時の様子です。

続きまして、今年度の取り組みについてご説明します。

昨年度までは、総合学科の中の園芸系列の生徒のみが、この養蚕にたずさわってきましたが、来年度本校が100周年を迎えるということで、来年度3年生になる2年生の総合学科全員で養蚕活動を行うことになりました。

まず、初めに全員で養蚕についてのオリエンテーションや事前学習を行いました。そして、5月19日から春蚕の飼育を行いました。そして、8月22日から秋の蚕の飼育を行いました。

また、北陸三県で唯一の養蚕農家である、福井県の杉本養蚕所で、養蚕のお手伝いをされている、奉書紬作家の嘉村さんに来校していただき、杉本養蚕所での蚕の飼育の様子や、ご自身で作られている奉書紬のストールを紹介していただきました。

今後の課題

今年度の養蚕によって収穫することができた繭は、春6000個、秋2000個です。現在は長野県の製糸会社 宮坂製糸所にて製糸され、保存していただいています。今後は、この繭を使って、来年度の100周年に向けて、どのような製品に仕上げていくか話し合い、決めていきたいと思っています。

参考資料は以下の通りです。

これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。